
夏の破片

ラウドルップ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夏の破片

【Nコード】

N2575L

【作者名】

ラウドルップ

【あらすじ】

河原優が、恋人の美涼とデートの待ち合わせをしている時、偶然、昔の知り合いの麗菜と出会う。

優は美涼とのデートの後、麗菜とドライブに出掛けるが、優は、あまりはつきりと麗菜の記憶を思い出す事が出来ない。

後日、ドライブの時に美涼が不機嫌になり、その原因が麗菜の細工にあると分かった優は憤慨し、麗菜を拒絶しようとする。

しかし、「もう、二度と会えない」と言う麗菜の言葉に、何故か動揺した優は、美涼とのデートをすっばかし、求められるまま海へ

のドライブに繰り出す。そして、その夜、優は麗菜を抱くが、翌朝、麗菜は消えてしまう。その後、美涼も失う事になった優は、後日、麗菜が結婚する事を知る。

優は、確実に自分の周囲の時間が流れた事を感じ、午後のベッドに横たわる。

(前書き)

20年程前に書いたたちよつとバブリーな恋愛小説です。
懐かしいなあ・・・。

「なあ、あんた優ちゃう？」

金曜日、駅のいつもの場所で美涼を待っていると不意に後ろから声を掛けられた。優は一瞬驚いたが自分の事かどうか分からないので、ゆっくりと声の方へ視線を向けた。そこには見覚えのない女が立っていた。優なんて言う名前の奴は世の中にいくらでもいる。自分の事じゃないのかと思い辺りを見回した。女は優を見ていた。

「おれ…の事だよな」

「そうや、あんたに聞いてるんや」

女は悪戯っぽい瞳をくずして微笑んだ。形のいい唇に乗った鮮やかな赤い口紅が優の目を引いた。かなりの美人だなと瞬間思った。

「おれは河原優だけど」

優は記憶をたぐり寄せながら答えた。

「それなら間違いないわ。全然覚えてへんの、しゃあないな」

女はバッグから手帳を取り出しボールペンを走らせた。

「神戸の時のコ、だよな」

「そんなん関西弁聞いて分かったんやろ。ほら」女はメモを破って優に渡した。「酷いやつちな。あんたワタシの事、口説いた事もあんねんで」

メモには電話番号らしい数字が並んでいる。「悪いな、そういうのいっぱいおっただんで分からんわ」

女は苦笑した。

「あんたらしいな。ワタシそこにおるから、気い向いたら電話してや。じゃあな」

女は唇で笑うと立ち去ろうとした。

「あの…」
「待ち合わせなんやろ。こんなええ女と一緒にいたら彼女が妬きよるで」

金曜日の夕方、勤めがえりの人達や騒がしい学生が右に左に流れていた。女も優に背中を向けて早足に雑踏の中に紛れていく。優は女のパープルっぽいスーツの綺麗な形のウエストラインあたりを茫然と眺めていた。

*

美涼の大学は近くにあり、たいていここで待ち合わせをした。優は美涼を待っている間も、ずっとさっきの女の事を考えていた。東京の大学に来る前、優は神戸の高校に通っていた。きつとその頃知り合った女の一人なのだろう。多分三、四年前の事だろう。ずいぶん昔の事のように感じる。

色々な遊びを覚えたばかりだった高校生の優達には、酒も女も音楽も車もいろんな物が目新しく見えた。世の中は面白い事や恰好いい事ばかりで満ちているように思えた。仲間でバカやっているのが楽しかった。こんな気の合う奴らはおらんとお互いに思ってた。

当時の仲間とはそれ以来合っていない。
最近面白い事もないし、こうやって女を待ってるのにワクワクもしない。

前はこんなんやなかったな。

女の話したなつかしい関西弁の響きと共に、優の意識には神戸港のマリントワーと心地好い潮の匂いが蘇った。

*

美涼は三十分程遅れてやって来た。

「ゴメンね。五限の授業抜けられなくて」

早足で来たせいか少し息を切らしている。三角形のピアスが揺れていた。

美涼の整った二重の瞳が少し上目使いに優を伺う。

「おこって、る？」

「そんな風にみえるのかな」

優が微笑むと美涼も安心したように口もとを緩めた。淡い色の口紅を見て、優はさっきの女の鮮やかな赤い唇を思い出した。

「行こう。おなかすいたね。ねえねえ、聞いてよ、今日はね……」

美涼と優は違う大学に通っている。一年の時、人に誘われて入ったスキーサークルの合コンで知り合ったのだ。そのサークルは年に一度、苗場や栂池に行く以外はコンパばかりやっているナンパサークルで、優はほとんど顔を出していない。

合コンの後、美涼の方から電話があった。美涼はやさしくてよく気がつく女で、かなりの美人だった。優は美涼の事が好きだったが、高校の頃の女達とは感じが違った。例えば優は時々、美涼と結婚する事とかも考えた。そんなイメージに優はいつも戸惑った。

美涼のお気にいりの小綺麗なスパゲティ屋で食事をした。訳の分からぬソースがかかっているスパゲティを見ても、優にはあまり旨そうには思えない。これなら中農ソースにたっぷりと青海苔でも乗ったタコ焼きの方が余程食欲をそそる。美涼の趣味じゃないらしい。まあどうでもいい。

それから映画を見た、古い洋画のリバイバルで美涼はラストで泣いていたが、優には退屈だった。そもそも、暗がりでも二時間も画面を眺める『映画』などと言うしんき臭い物は好きではなかった。ワケの分からないフランス映画とあっては、なおさらだ。

優が今までに面白いと思って見たのは大阪の元ボクサーが出ていたボクシング映画ぐらいだった。脳の手術を受けて引退したボクシングしか能の無い男が、割れる頭を抱えて復帰する話だ。

『ボディばかり打つな。頭を狙ろつてこい』 男の叫びはむなしく、それ故に滑稽だった。必死になるなんて、このご時世では、なんと言っか、アホだ。

*

「じゃあね。また電話するね」

映画が終わり美涼と別れた。美涼は自分の部屋に来てもらいたか

ったようだが、優は翌日早朝のバイトがあると嘘をついた。

部屋に帰ると、優はさっそくさつき会った女に電話を掛けてみた。長いコールが続いたがなかなかつながらない。優はずっと待っていた。何故か優はどうしても女と話がしたかった。優があきらめて受話器を置こうとした時。不意に受話器の向うから声がした。

「もしもし」

あの女の声だった。

「あの、河原優ですけど。さつき会った…」 「待ってっで、思ったより早い時間やったな」

時計は十二時半を回っていた。

「ひよっとしておまえ、ずっと起きて待ってる気やったんか」

「あんたかて、今日はずっと私と話をしたい思うとったんやろ」

「えらい自信があんねんな」

「そやなかつたら、あんたも二十回も電話のコールを待たへんやろ」女は笑った。「実はな、ずっと電話の前におってん。それでな、電話が鳴るのを数えててん。すぐに出るのも今イチ恰好悪いやろ」

優は苦笑した。

「アホか、切る所やったぞ」

「あんた運がええわ、そのまま切っとつたら終わりやったで、電話の切れ目が縁の切れ目や。わたしとほんまに話したい思ったもんとか話したあないしな」

「なんかええ加減やな」

「ええ加減な男が多いから防衛しとんにやで。やっぱ優は信用できるわ。今から出てこれるか？」

優は待ち合わせの場所に車を出した。

*

「なんや、おとなしい車乗っとな」

女はサイドシートでダッシュボードに積んだCDをいじりながら言った。

「昔の車はもう売ってもうたわ。あんな車乗っとならええ年して

「恥ずかしいしな」

「なんか、みんな賢うなつてもうて、行儀ようなつてまうんやな。わたしも人の事は言えんけどな」

「なあ、何処に行きたい？」

「赤信号で止まった優は女に言う。」

「そやな、海がええな」

優は左にウインカーを出した。「なあ、あんた大学行ってんのか？」

「ああ」

「あんた頭良かったもんな、わたしアホやったし結構コンプレックスもつてんねんで、そう言うのに」

「結局、世の中何処に行ってもアホばかりやって、教えてくれただけやったわ」

「親、聞いたら泣くで」

女は笑って言った。

真夜中の埠頭で車を止めた。二人は車を降りる。初秋の残暑もこの時間になると、岸壁を渡る風は少し寒いくらいだった。

女の薄いデニム地の長いスカートが揺れている。女は白いTシャツに薄いパーカーを羽織っていて、夕方の印象とはずいぶん違う。

年上かと思っていたが案外年下かもしれない。「なあ、寒くないか？」

「優は前からやさしいやつだったな。ナオコさんっていたやろ。あんたが前に付き合つとつた女」

「ああ」

「ずるい男やって言うとつたけど、あんたには文句言われへんて言うとつたわ。ずるいけどやさしい男なんやって、変やな」

女は埠頭のコンクリートブロックに座った。「……………」

「大丈夫やで、寒くないし」

優はポケットからマイルドセブンを取り出して火を付けた。

「わたしにも一本くれるか」

優が差し出したタバコをしなやかな仕草で取り出して口にくわえた。火をつけると白い煙が女の唇から吐き出された。

「なあ、やっぱおれ、おまえの事思い出せへんわ、悪いけど」

「ええよ、別に。キョウコって言う名前や、サカグチっておったや。あいつの彼女やったんや」

「サカグチってあの一口学年下のやつか」

「同じ学校の後輩だった。」

「そうや、あいつとタメや」

「あの時、髪、シヨートにしとらんかったか」「そうや、ちょっとは思い出したか」

そう笑ったキョウコは、くわえ煙草のまま両腕をうなじに回し、長い後ろ髪を上げるようにした。優にもなんとなく覚えがあった。

「ああ、あんまり覚えてへんけど、サカグチの彼女やったら、確か酔って口説いた事があるわ。後でサカグチに泣きつかれたからな」

「そうや酔っ払ったままドライブしてな。あの頃は神戸港もこんな感じやったな」

「何を言うたんかは覚えてへんわ」

「好きや、やらしてくれ」

「え？」

「初めて口利いた日にあんたはそう言うたんや。酔っ払ったし、なんちゆう男や思うたわ」

優は苦笑した。

「あの頃はええ加減やったからな。おれも」「あの頃はみんなええ加減やったよ。それでも楽しかったな」キョウコはタバコを揉み消して立ち上がった。「なあ、車で少し寝てもええか？ 明日も仕事があんねん」

優は車に乗ってエンジンを掛け、エアコンのスイッチを入れた。

「土曜も仕事あんのか」

「エステティシャンってやつやねん。女の体いじくりまわすねん」

「どつりでスタイルええねんな」

「そうか？ うれしいわ」

「なあ寝るんやったらちゃんとした部屋で…」「そんな所あんと入ったら、寝してもらえへんやろ」

「そんなに信用ないか」

キヨウコはリクライニングを倒した。

「でもな、あの時あんと寝とったら良かったかなとか思うとってん」

「なんでや」

「少なくとも、名前くらいは覚えてもうとったやろしな」
そう言つて、笑った。

*

キヨウコが眠っている間、優は外でタバコを吸っていた。フロントガラスの奥でキヨウコは寝息を立てている。

可愛いな、と思った。

あどけない寝顔は高校生のようにも見えた。　なんだか不思議な女だ。優はいい気分だった。　ずいぶん長い間味あわなかった感覚だ。

*

女をマンションに送ったのは朝の五時だった。

「これから仕事か？」

「そうや、暇な学生とはちやうねんで」

「仕事もそんな言葉でやっとなのか？」

「アホ、ヒョージユンゴぐらい話せるわ」

車を降りると、キヨウコは運転席の方に回って窓を叩いた。優はパワーウィンドウを下げる。

「どないしたんや」

「なあ、ちよつと顔だしてや」

「ここからか」

キヨウコが頷くので優は窓から首を出した。　キヨウコは目を閉じ優の唇に軽くキスした。唐突だったので優は少し驚いた。

「今日のな、お礼や。うれしいか」

「アホか」

優が微笑むとキョウコも笑った。

無邪気な笑みで、優はまた可愛いなと思った。キョウコがマンションに消えるのを見届けて、車を出した。

2

ドライブの帰り、美涼は不機嫌だった。

夕食のシーフードリアを無言で平らげ、車の中でも窓の外ばかり見ていた。

海岸添いの道は渋滞で車はロクに進まない。FMラジオからは場違いな感じの洋モノのポップスが流れる。それが気まずい雰囲気を感じた。美涼はラジオを止めて、唐突に言った。

「クルマを止めて」

優はトイレでも行きたいのかもしれない、ドライブインを探したが、美涼はいらいらした様子で言い放った。「ここでいいから止めてよ」
優が車を止めると、美涼は車を降りてドアを強く閉めた。

「おいどうした」

優はサイドシートの窓を開けた。

「今日はありがとう。藤沢から電車で帰る。さよなら」

美涼は事務的な調子で言っただ速に道路脇の細い路地に消えた。

「おい……」

優の車に渋滞の後方の車から一斉にクラクションが浴びせられる。

優は車を発進させた。

*

部屋に帰って今日の事を考えていた。

美涼があんなに不機嫌な様子を見せた事は今までない。思い浮かぶのはキョウコの事だ。電話が鳴った。優は受話器を取った。

「もしもし、キョウコやけど」

「ああ」

「どうしたんや、元気ないなあ」

「そんな風に聞こえるか」

「なんでか当てたるか」

悪戯っぽい口調でキョウコが言う。

「……………」

「彼女とドライブに行つて、ケンカでもしたんやろ」

「なんでそんな事が言えるんや」

「やっぱ、凶星か」

優はいらいらした。キョウコが何かしたに違いない。

「何をしたんや。おまえ」

「ちよつとなピアスをな。ダッシュボードの中に落としたんちゃうか思っねんけどな。彼女から聞いてへんか」

「なんでそんな事すんねん。そんなもん、そんな所に落とす訳ないやろ」

「怒つてんのか」

「当たり前や」

「やっぱりな」

「どつという意味や」

「やっぱりするいんやな、あんた。やさしいやつちゃけど」

「何やて…」

しばらくしてキョウコがポツリと言った。「私、優の事、好かんわ」

「勝手にせえや」

優は乱暴に電話を切った。その瞬間、優は何故か後悔した。思いもよらない動揺があった。優はしばらくキョウコの事を考えたがすぐに止めた。

「一回会つたくらいで調子にのんな。アホ」 優は独り言を言つて、タバコに火を付けた。一本のタバコをゆっくりと吸つてから、美涼のダイヤルを回した。

「もしもし」

受話器の向こうの美涼は曇ったような声で言った。

「河原、ですけど。美涼がなんで怒ってたか考えたんだけど、心当たりが一つあってさ」 美涼は黙っている。優は続ける。

「車の中で女物のピアスを見つけた。とかじゃないかな」

「……………」

美涼は答えない。やっぱりそうらしい。「先週、田中たちに車を貸した時にさ。サイドシートに乗っていた一年生の女の子が、ピアスを外してなくしたらしいんだ。電話があつてさ、シートの下にあったから返そうと思ったんだけど、すっかり忘れてて、ダッシュボードに突っ込んだままになってたんだ。今探したけどなくてさ、もしかしたら美涼が持つてるのかなって…、あの後、車に乗ったのは美涼だけだからさ……………」

田中に車を貸した事は本当だった。美涼は黙っていたが、しばらくして言葉を選ぶようにゆっくりと言った。

「だいたいはそんなトコだけだね。百分百は信じられないわ。今の話」「どうすれば信じてもらえる」

美涼は軽く溜め息をついた。

「ねえ、もし私以外に関係がある人がいるなら正直に言つてね。私なるべく冷静に聞くようにするから」

「いないよ。そんなの」

「でも、約束して」

「……………分かった」

翌日の夕方、会う約束をして電話を切った。冷蔵庫から缶ビールを取り出し、プルリングをひねる。 冷蔵庫から缶ビ―

『やっぱりするいんやな、あんた』『私、優の事、好かんわ』

優はキョウコの言葉を思い出していた。

「うぬぼれんな。おれも出すぎた事をする女は好かんわ」

ビールを一口飲んで、優はベットに倒れ込んだ。

優は美涼の事が好きだった。もう二年以上も付き合っているが、一度として美涼の事を嫌いに思った事はない。

美涼はまるで空気の存在のように優に馴染んでいた。美涼はいつも、優の気づかない所で優の為に心配りをしている。美涼はいつも趣味のいい洋服を着て、趣味のいい化粧をして、言葉を選んで話した。

美涼はきつと優のイメージに合う女になろうと心がけているに違いない。そう言う努力は別に有り難い事でもないが、なんと言うか、いじらしいと、優は思った

可愛いやつやな。優は呟いてビールを飲み干した。

3

優は目覚まし時計のベルで目覚めた。

今日は2限の授業に出なくてはならない。下らない法律の話だが、出席しないと単位が危なかった。優は美涼の事を考えた。今日の夕方会わなくてはならない。会ってまた今までどおりやり直そう。優はシャワーを浴びた。キョウコと会った事は間違いだった。もう二度と会わないだろう。おれはいつまでもふざけたガキではない。簡単な朝食を食べて、教科書を用意した。この時間ならもうラッシュも終わっているだろう。優が出掛けようとした時、電話が鳴った。

「もしもし、おったか」

キョウコの声だった。

「なんか用があんのか」

優はなるべくそっけなく答えた。

「会いたいんや」

「これから学校や、晩には女とも会う。もっともよっぽどの用やない限り、もうおまえとは会わんけどな」

「よっぽどの用ってどんな用や」

「さあな」優はキョウコの無神経さに腹が立った。「そんなん、話し聞いてから、こっちで判断するわ」

「もし、二度と私に会えんとしたら、よっぽどの用になんのか」
「……………」

「待ってるわ。前会ったところで、ずっと待つとるし、気が向いたら来てや」

そう言っつて電話は切れた。

優は荷物を置いて机の椅子に座った。

タバコに火を付けたが二、三回ふかしてすぐ消した。

『二度と会えん』

関係ないわ。おれもそのつもりやったんや。優はTVを点けた。芸能人の離婚の話をしていたが、何も耳に入らなかつた。

何を動揺してんねんおれは。

午後の法律の授業は出ないと、単位が危なかつたが、もう学校に行く気など、なれそうにもない。

優はしばらく部屋の中をうろつき回り、机の引き出しを開け、車のキーを手に取った。

*

キョウコはあの駅の前にいた。

人込みでもよく目立つ、赤いワンピースを着ていた。優は無言でドアのロックを外す。キョウコはうつむき加減にサイドシートに滑り込む。優は車を発進させる。

しばらくの間、二人は何も話さなかつた。優はでたらめに道を選んで車を走らせる。

「なあ、二度と会えんつてどう言う意味や」キョウコは答えなくて、窓の外を見ていた。接近している台風の影響で低い雲が垂れこめ、街は暗い色をしていた。いつ降り出してもおかしくない重たい空気はエアコンの風からも分かつた。

「なあ男は女と寝よるやろ。分かつてんねん」……………」

優はフロントグラスを見つめていた。

「あんたには迷惑を掛けた思うわ」

「…質問と答えが違うわ」

「私な、怖いねん。毎日いろんなもん失くしながら生きとる。そう

いうのつていつも失くしてから気付くねん。何を失くしたんかは分からへん。大切なもんやった事は分かんねん。でもな、何を失くしたんかは分からへんねん」キヨウコは窓の外を見つめている。泣いてるのかもしれないと優は思った。

しばらくしてキヨウコは呟いた。

「あんたの質問に答えなあかんか」

優はそれには答えなかった。

「どこに行きたい。おまえの行きたいところなら何処でも連れてい
つたる」

「海がええな。この前みたいなんと違ってちゃんと砂浜があつて、
人があんまりおらんところ」しばらくして言葉を続けた。「私ら海
のある所で育ったやろ。そういう所がええと思わんか」

それから二人は一言も言葉を交わさなかった。途中キヨウコは少
し眠った。キヨウコの寝顔は少し微笑んでいるように見えた。

可愛い寝顔やな。と優はまた思った。

*

車を止めて砂浜を少し歩いた。

霧雨の降る秋の砂浜に人の姿はなかった。空の色を映した灰色
の海が、少し強くなつた風を受けて大きな波を立てていた。

優は腕時計に目をやったが、もうそんなものに意味はないと思い、
腕からはずした。二人はコンクリートの堤防に並んで座った。

「なあ、ずいぶん走ったけどどこなんやここ」「千葉や」

「東京のこつち側つて初めて来るわ。二年もおんのにな。こんなと
ころまで来たら、女の所は間に合わんのちゃうか」

「おまえの気にすることやないわ」

キヨウコは不意に優を見つめた。

「なあ、近くに寄つてええか」

優がうなずくとキヨウコは優の左腕に抱きついた。腕にキヨウコ
の乳房のかたい感触を感じる。肩に押し付けられた髪の毛が優の頬
をくすぐる。

「こうしてるとな、幸せやわ。あんたといるとな自分の失くしていったもんを思い出せる気がすんねん」

優は海を見つめた。

「女がな。今、おれの事待とるねん。おれはそいつの事が好きや。行かんとアカンかったんかもしれん。でもおれはな、おまえの事が必要やねん。おまえに側におって欲しい」

「私、側におるで。今はそれでええやん」

優はキヨウコの腕をほどき、肩を抱いた。キヨウコは優の胸に頭をぴったりとつけてしがみつくように抱きついた。

キヨウコの頭は小刻みに震えている。キヨウコは泣いていた。優は霧雨で湿ったキヨウコ髪をなでて、キヨウコの唇に唇を合わせた。優の目から、思いがけず涙が溢れた。優は自分の中の乾いた部分を感じた。この街に来てからいつも無意識に感じていた乾きだった。

それが今つるおつていく。砂漠の中に湧いた泉のように、キヨウコの心が優の心に染み込んでいく。ずいぶん長い間、この女を待っていたんだ。と、思った。優の腕の中のキヨウコが記憶の中の高校生のキヨウコと重なる。キヨウコの言った『失った部分』を優も強く感じた。

どうなっただっていい。こいつとられるなら、もうどうなっただっていい。

優はもう一度キヨウコの体を抱き締めた。「おまえと寝たいねん」
優が言うと、胸の中でキヨウコが何も言わずうなずいた。

*

海岸添いのレストランで夕食を食べた。

二人の他に客は誰もいなかった。外は激しい雨が降っている。二人はあまり話をしなかったがキヨウコはずっと微笑んでいた。優も幸せだった。

海岸に面したモーテルで車を止めた。シャワーを浴びて二人は抱き合った。キヨウコは時折小さな声を上げた。優は何も考えず激しくキヨウコの体をまさぐった。

「もう二度と会えへんのか」

一度目の行為を終えて優は言った。

「上手く言えへんわ、悪いけど」

「上手く言えへんでもええ、何か言ってくれ」 優はキョウウコの体を抱き締めた。

そうしてないと、もう自分がダメになってしまいそうや。優は思った。

「あかんねん。あんたとは一緒におれんねん。あんたは頭がええけど、きつと分からへんわ。女はな、頭でモノ考えるとは限らへんねん。女はな子宮でモノ考えとんねん」

「おれには意味が分からんわ」

キョウウコは泣いていた。優はキョウウコの髪を押さえて口づけした。それから二人は何度も交わった。その間中、激しい雨音が窓を叩いていた。

*

優が目覚めるとキョウウコはいなかった。

カーテンを開けると晴れ上がった空からまぶしい太陽が光そそいだ。

優は目を押さえた。

優はクローゼットに吊るしたシャツのポケットからマイルドセブンを取り出した。一本だけ残ったタバコに火を付け、空箱を握り潰してゴミ箱に投げた。空箱はゴミ箱を外れ床に転がった。ベットに腰掛け、優は天井を眺めた。

こんなもんなんや。優は呟いた。

こんなもんなんやな…。

*

途中のドラブインでキョウウコのマンションに電話をかけた。テープの声が使われていない番号である事を告げた。

*

自分のマンションに着いたの昼前だった。駐車場に車を止めて階

段を登る。優の部屋の前に人がしゃがんでいた。美涼だった。

美涼が上目づかいに優を見つめている。優は言葉を失って立ちつくした。

「昨日ずっと待ってたんだけど、来てくれなかったから、部屋に来てみたの」

「ずっとか」

美涼はうなづく。

優は美涼を部屋に上げた。

インスタントのコーヒーを作ったが、美涼は手を付けなかった。

美涼は優に手を差し出した。手にはキョウウコのピアスが握られていた。

「女の子と会ってたの？」

「ああ」優はそれを受け取った。プラスチックの安物だった。「あいつとはもう合わへん」「どうするの」

「どうするって」

「私の事」美涼は優の目を見つめた。「まだおれに美涼を抱く資格があるのか」

「あなた、次第よ」

帰り際、美涼は優の頬を平手で思い切り殴った。

*

一ヶ月程して、キョウウコから葉書が来た。裏にはウエディングドレスを着たキョウウコが、男と写っている写真が印刷してあった。

『僕たち結婚しました』と印刷された文字の下にキョウウコのメッセーじが書かれている。『優も幸せにりいな』

丸っこい可愛い字だった。

優は葉書を机の隅に立て掛けた。葉書の下にはキョウウコのプラスチックのピアスが日の光を反射している。

「勝手な奴だよ……」

優は呟いて、午後のベッドに寝転がる。

秋の色褪せた陽射しが差し込む部屋で、優の意識は薄くなり、や

がで、心地のよい眠りに引き込まれていった。

机の隅に立てかけられた葉書が、薄く開けられた窓から差し込む風に、パタリと倒れた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2575/>

夏の破片

2011年1月16日08時46分発行